

「祝！同窓生が教授・准教授就任」

この度、4期生の小林潤先生が母校の保健学科国際地域保健学分野教授に、6期生の大城真理子先生が公立大学法人名城大学国際学群経営情報教育研究学系 診療情報管理専攻准教授に、6期生の長井裕先生が母校の女性・生殖医学（産婦人科）准教授に、9期生の友寄毅昭先生が母校の内分泌代謝・血液・膠原病内科学（第二内科）准教授に就任されました。

我々同窓会会員にとっても大変喜ばしいニュースですので、今後の抱負について寄稿していただきました。

上原キャンパスに戻りました

琉球大学医学部保健学科 国際地域保健学分野 教授 小林 潤（4期生）

4月1日に保健学科国際地域保健学教室（旧母子・国際保健学）に外間登美子先生の後任として赴任しました。着任した日には同窓会から大変美しい花束をいただき、さらに学生向けの講演会まで企画していただき同窓会のサポートを肌で感じ大変嬉しく思っています。講演会には多くの学生諸君が集まってくれました。また直接アプローチしてくる学生さんもあり、母校に戻ってきたのは間違いでなかったと確信しています。実は母校に戻ろうと私の背中を押してくれたのは、ある先生から「沖縄は国際保健や熱帯医学に貢献する人材を輩出する場所であるので、機会が与えられるならば日本のためにもどってはどうか」と言われたことでした。国際保健の分野に興味をもつ保健医療系の学生は各大学で一学年に一人程度といわれてきましたが、近年この数は確実に増えています。さらに日本のなかで沖縄はこれらの人材を多く輩出してきた場所でもあるといわれているのです。今後も琉球大学から国際保健の世界に飛び込んで活躍する人材ができるように、やってみたいと思っています。近年の若者は内向き、草食系とかいわれていますが、そうでない学生も多いと感じています。日本各地で積極的な学生に会い直接話をする機会も多々ありました。アメリカでは一番優秀な医学生・看護学生は国際保健を目指すというようなことも聞きました。もしかしたらこの動きは日本にも来ているかもしれないのです。

13年前に琉球大学から東京新宿の国立国際医療研究センター国際医療協力局に移り、アジア・アフリカでの国際協力活動・国際保健研究を展開してきました。このなかで国際保健は単なる援助に付随した学問から地球規模課題で考える学問に大きくシフトしてきていることを感じています。世

界が先進国と途上国という単純な南北関係では説明できなくなっていることが影響しているのでしょう。多くの途上国が新興国となり、後進途上国も急激な発展のなかで優秀な人材も育ており保健事業推進だけでなく研究においてもイコールパートナーと考えるときが来ています。しかしながら発展に取り残された社会的弱者の貧困と、これらの人々に対する教育・保健医療の不均一は未だ問題が山住となっています。そしてこれらの問題は沖縄においても他人事ではないのが事実なようです。沖縄から発信できるのは何なのか考えるのも必要かと思っています。

昨日から徒歩通勤を始めてみました。宜野湾街道を横切り、千原キャンパスを通過して上原キャンパスに向かって登ってきました。本学の生協の周りには昔と同じように深い谷を緑が覆っていました。こんなに美しいキャンパスを持つ大学は数少ないでしょう。暑いながらもすがすがしい風を感じ、なんとも優雅でノスタルジックな気分になりました。同窓会にも微力ながらご協力できればと勝手に思っているところです。保健学科の5Fにあります。キャンパスに来られる機会があれば、気軽に教室にお立ち寄りください。

